

# आयूस: あーゆす

〈発行〉 京都文教大学図書館  
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市横島町千足80

## ❖ ゴシップ的アメリカ論 ❖

京都文教大学図書館長  
現代社会学科・教授(社会学) 柏岡 富英

ある小雑誌に「不思議の国アメリカ」という題でエッセイを連載している。新聞・雑誌の記事や、送られてくる資料を切り口にして、「ゴシップ的アプローチ」で現代のアメリカを描いてみようという試みである。これまで宗教、フィランソロピー、性、大学の入試、国立公園などについて書いてきた。ちょっと変わったアメリカ紹介という意図のほかに、「いったいアメリカの何が気になってきたのだろう」という、いわば「自分探し」の意味もあるので、エッセイとはいえ、結構真剣に取り組んでいる。資料を調べているうちに大変な思い過ごしに気づいたり、自らの無知蒙昧を思い知らされたりして、とてもいい勉強になる。

私がアメリカを「発見」したのは1960年代の半ばだったから、かれこれ50年ほどの付き合いだ。その間、学生運動と人権運動と女性運動が吹き荒れ、ニュー・ライトが登場し、ベトナムとイラクで戦争があり、冷戦の相手だったソ連がずっこけ、ネオコンが権勢をふるい、そして黒人や女性かがホワイトハウス入りすることになった。この原稿を書いている時点では、ウォールストリートが大変なことになっている。

全般的に言って、アメリカは世界のあこがれの国から、普通の国（ひょっとすると忌み嫌われる国）へ変貌した。日本のアメリカ研究は長い間、「偉い」国に学ぶ、という姿勢が強かった。したがってまた、偉くなくなった国に対する研究の情熱も、近年急速に失われたように見える。しかしアメリカをよく知らないで日本が生き延びる道はないのだ。大上段に構えて見るのではなく、日常生活のゴシップから隣人の心の内を覗き込んでみたい。

(ちなみに、このエッセイを読みたいという奇特な方がおられたら、現代社会学科の黒宮講師にお問い合わせいただきたい。)

(かしおか とみひで)



## 人間は<猛獣>である

京都文教短期大学図書館長

児童教育学科・教授 (幼児教育学) 照屋敏勝

大阪の天王寺動物園で「戦時中の動物園」展(8/12~24)が開かれた。平成18(2006)年から毎年8月に開催されている。朝日新聞に宮下実園長の話が載っている。「戦後60年が過ぎ、戦争関連の催しが減りつつあった。そういう時だからこそ、動物園から戦争の悲しみを伝えようと、職員たちが考えた」ということである。

これは動物園のすぐれた企画である。戦争の悲しみは人間だけではない。動物や植物も同じである。会場となっている「レクチャールーム」には「猛獣処分」として殺害されたピューマ、トラ、ヒョウ、ライオン、ホッキョクグマの剥製が展示されていた。生きていくかのごとき一頭一頭と対面していると、彼らの聲や叫びが時空を超えて伝わってくるようであった。「われわれ動物は動物園を訪れる多くの人間の大人や子どもたちに楽しみや癒しや笑いを与えてきたのに、不都合になったらわれわれを殺すんですか。人間はあまりにも勝手すぎる。その“猛獣”を殺す人間こそが猛獣じゃないですか」と、問い詰められているような気がした。

天王寺動物園では、昭和18(1943)年の9月4日から9月23日の10日間で、チョウセンオオカミ、ヒグマ、ハイエナ、ツキノワグマなど10種26頭が毒殺、薬殺、絞殺などの方法で殺害されていった。しかも、殺害の役が飼育係に課された。そのことも残酷である。動物園からは人間によって「猛獣」に分類された動物たちが次々に消されていったので、当時の人々は「動物園」と呼ばずに、「静物園」<sup>や</sup>とか「家畜園」と<sup>や</sup>揶揄していたようである。

私は東京の上野動物園にも電話できいてみた。そこでも、天王寺動物園と同じように、8月17日から9月1日までの2週間で、ゾウ、アメリカヤギウ、クマ、ライオン、トラ、ガラガラヘビなど15種27頭が毎日のように殺害されていった。

絵本『かわいそうなぞう』(土家由岐雄/文、武部本一郎/絵)は、戦時下の上野動物園における3頭のゾウの「餓死」という名の殺害をめぐる悲しい物語である。ジョンは食べ物と水を与えられなくなってから13日目に餓死した。トンキーとワンリーは20日目に餓死した。まさに人間による動物の緩慢なる虐殺である。

『おこりじぞう』(山口勇子/原作、四国五郎/絵)は、ヒロシマで被爆した少女の死の物語である。

「女の子は、ゆらゆら ゆれるように ちかづいて やっと おじぞうさんの ところまできたが、もう いっぱい あるけないという ふうに、ぱったりと うつぶせに たおれた。」そして、「みず…、…、みず…」と、かすかな声を発した。しかし、どこにも水はない。おじぞうさんは悲しみと怒りの涙を流して、その涙を少女の口に注いだ。少女はかすかに笑って息絶えた。おじぞうさんは仁王のような顔になって、その怒りに耐えかねて、グサグサ と粉々に自壊してしまった。おじぞうさんも被爆していたのだ。

戦争と平和に関する絵本や児童文学は日本では600種類ほど発行されている。それほど多様な関心と問題意識が持続されている。

(てるや としかつ)

## 本学の菩提樹

学園長(仏教学) 澤田謙照

ご承知のように、少子化による生徒減によって、志望校を限定しなければ大学全入可能の時代に入ってきましたが、参考までに、私立の大学、短大の学校数と学生数を調べますと、平成19年度における私立大学は580校(学生数約207万2千人)、短期大学は398校(学生数約17万6千人)となっており、国公立に対する私学の割合は、学校数では、大学78.7%、短大91.7%、学生数では、大学73.2%、短大94.1%〔『私学必携 第14次改訂』(監修私学法令研究会)〕となっており、学校数、学生数何れも、私学の比率は非常に高いことが解ります。

学生さんが、これだけ多く私学に来て下さっているから、私学は安泰かと言えば決してそうではありません。「国・公立」と同じように「私立学校」も「一つ」に束ねられるかといえそうではありません。学問・研究は別として、大学580校、短大398校、学校法人、建学の精神、校地、財政、事業、施設、環境等、何から何まで別々であります。その別々の学校の根底が学校法人の「建学の精神」とそれに伴う「校風」であります。

この頃、漸次、死語化しているのではないかと危惧しているのですが、老舗という言葉があります。先祖代々続いて繁盛している店、また、それによって得た顧客の信用、愛顧を意味しますが、最近マイカー用ガレージを備えた巨大スーパーに顧客が吸収されて、軒を並べていた老舗の多くが店を閉じています。例えば、食料品の老舗は秘伝を守りつつ、その店でなければ得られない微妙な味覚で商いをしていたのでした。残念なことです。

私は、私学は、本来この老舗の学校であるべきだと思うのです。「国公立とやっているところは同じに見えるが、どこか一味違う何かがこの学生さんにはある」というような学校です。それは、先祖代々継承されてきた歴史と伝統の中で培われる筈のもので、その伝承は決して物質でも、相伝していく人物だけの力量でもなくして、それを活かすべく、願いの中で生き続けてきた精神・心ではないでしょうか。

かつて私は、高等学校時代の教え子のお母さんから、大根の漬けものをお茶請けに頂戴しながら聞いたのですが、「この漬け物の糠は、私が当家

に嫁ぐ時に私の母が嫁入り道具の一つとして持たしてくれたものです。住居移転の時も臭いがしても、これだけは運びました。こんな糠でも毎日手を入れてやらないと直ぐ虫が湧きますので手を入れてきましたが、何十年の歴史を持ったお漬け物です。この糠に母の愛を感じながら漬けてきました。どうぞ召し上がれ」ということでした。このお話はあまりにも貴重で勿体なく、私の感想より、皆さまで味わっていただければ幸いです。

私は、小、中、高校がある平安神宮に近い岡崎キャンパスで勤務させていただいた関係上、この宇治キャンパスは新参者です。此処に通勤させていただきながら、ますます思いが深まるのですが、私には、この環境が、お釈迦様が成道されたインドの仏陀伽耶に似た聖地と思えるほど清々しい場所として期待するのです。正門から東に連なる緑の樺隧道は、そのまま悠久なる天竺へと連なるがごとく、その奥には、菩提樹とおもわれる楠の大木を光背にして、本学の中興の祖、大僧正大島徹水先生の胸像、そして、どっしりと構えた「総願の鐘」が常に、十方に「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」(邦訳「いろは歌」)の真理の音を響流しています。二千五百年の昔、インドは伽耶の地、ピッパラ樹の下でお釈迦様は正覚(bodhi・菩提)を開いて仏陀になられた故に、伽耶は「仏陀伽耶」、ピッパラ樹は「菩提樹」(さとり樹)と呼ばれました。皆さんにとって読書三昧は最高の境地ですが、本学の楠の樹下で瞑想して目覚め、合掌し、「南無仏」と称えて下されば、そこが「仏土」であり、楠が「菩提樹」であります。この宇治キャンパスの味は覚めから始まると思うのです。学問・研究が「覚め」という芳香で薫ぜられた人格は、わが国私学の随一として期待されると思うのです。

合掌  
(さわだ けんしょう)

### ★おすすめの本

日本戦没学生記念会編『新版きけわだつみのこえ』(岩波文庫)

立花隆著『宇宙からの帰還』(中公文庫)

三宮麻由子著『そっと耳を澄ませば』(集英社文庫)、同著『鳥が教えてくれた空』(同社)

## 私のすすめる3冊

児童教育学科・特任講師(教育学) 増田 秀嗣

青春時代、特に学生時代には、恋愛と結婚、戦争と平和、政治と経済、教育と福祉等々、誰もが直面し避けて通れず、否応なしに突きつけられる課題である。「読書の糧」、「先人に学ぶ」、幾多の図書の中から適切な1冊を選ぶ?!これは至難の業であり、無理というもの、そこで、青年時代に読んで、今も深く印象に残っている図書を紹介することで、その責の許しを乞いたい。

### 1. 『竜馬がゆく』

司馬遼太郎 著/文芸春秋(文春文庫)

多くの歴史小説の中で、特に楽しく活力を与えてくれる小説の一つだ。今も、根強い人気を持ち続けている歴史上の人物一坂本龍馬、幕末の争乱期に、一介の郷土にすぎなかった坂本龍馬が、あれほどの活躍を、なぜ果たし得たのか。紆余曲折を経て、勝海舟との出会いがあり、「薩摩連合や大政奉還、あれは全部龍馬が一人でやったことだ」と、維新史で勝海舟に言わしめたほどの活躍をした龍馬、それでいて、青春の余韻を残したまま、世界に羽ばたく海援隊の夢も、目前の明治維新の実現も見ることなく、33歳の若さで無念の死を迎えた龍馬、もちろん非凡な運と才能を持ち合わせていたとはいえ、僅か10年の短期間を駆け抜けた行動の中から、人生哲学を迫体験することは有意義で、何か一つ重要なポイントを学ぶものがある小説である。

### 2. 『人間の条件』

五味川純平 著/岩波書店(岩波現代文庫)

昭和18(1943)年、植民地の満州で満鉄調査部の勤務だった時に、美千子と知り合い結ばれる梶は、招集免除を条件に労務管理の職につくのだが、その展開は次々と迫力ある情景を突きつける。植民地の軍隊における暴力と残虐行為、やがては、良心と呵責、苦悩と葛藤、そして戦争に疑いを持ち、反抗には過酷な制裁が展開され、迫害と屈辱、人間の善意と希望、愛と尊厳までも、無情にも濁流のように押し流す戦争の悲惨さを告発する。根底から魂を揺すぶられる迫力で、忽ち読み耽る状況に陥る戦後文学の記念碑的な傑作と評される図書である。

### 3. 『数は生きている』

銀林浩・楳忠男 共著/岩波書店

数とは何か?多くの図を示しながら対話形式で語った、数の世界を実に分かり易く紹介した図書である。1, 2, 3, ……という数の歴史、ゼロの発見、小数のしくみ等々、代数学の基本定理にまで展開する。自然数、小数・分数、無理数、負の数、複素数にいたるまで、数の世界が広がるのが、いかに必然であるかを紹介してくれる。分数のわり算では、なぜ分母と分子をひっくり返してかけるのか、負の数どうしをかけるとなぜ正の数になるのか、などなど、平素、疑問をそのままにしていたことが、大いに考え直させられ、「なるほど、わかった!」と、まさに「目からうろこが落ちる」、算数・数学の見方が大きく変わる名著である。

(ますだ ひでつぐ)

先日、学生に「興味をもっていることは何か」とたずねてみたところ、「ありません」と答えた者がすくなくなかった。多くの人にとって、これは驚くべきことであろう。大学に来て授業にも出ている。友人付き合いやサークル活動、アルバイトに精をだしたり、恋愛にだって思い悩んだりする。そんな毎日を過ごしていれば、「興味」をもって取り組んでいることくらいあるだろうと思うからだ。

そんな学生が増えてくると、大学では非常に困ったことになる。なぜなら、大学で学ぶ「学問」は、何ごとかに「興味」をいだいてはじめられるものだからだ。そういえば、大学生の学力低下だけでなく学習意欲低下なんて話もよく聞かれる。何ものかに興味を示すことがなければ、「学問」へといざなわれることもないということか。

そういうぼくは、これまで、ナショナリズムにかんする研究をおこなってきた。それについて本も書いた。だが、「ナショナリズムに興味をもっているのですよ」とたずねられると、おそらく、「そうでもないですよ」と答えてしまう。個人的な興味が研究をうながし、それについての文章まで書かせているかといえば、けっしてそうではない。

「興味」って何だろう。ちょうど良いぐあいに手元に『広辞苑』があるので、「興味」という言葉の意味を調べてみた。すると、「物事にひきつけられること。おもしろいと感じること。」とある。心理学では、「関心の一種で、特にある対象やできごとに関心を向ける傾向」と考えられてもいるらしい。そこでさらに、「関心」という言

葉の意味を調べてみると、「特定の事象に興味をもって注意を払うこと。或る対象に向けられている積極的・選択的な心構え、または感情。」とある。

「興味」とは、自身が「あるものに強く心を傾けること」のようだ。では、「あるものに心が傾く」衝動は、個人の内側からわきでてくると考えてよいか。

女性への興味を考えてみるとわかることだが、ふつうわたしたちは、女性一般にたいしてというよりも、特定の女性に興味をいだく。そして、その女性に興味をもったのは、自身の価値観や美意識などに合致し「心が傾いた」からであろう。

ただし、自身の価値観といえど、個人がつくりだしたものではない。同じ文化に属してきた人びとのあいだで「値する」と承認されてきたことを、わたしたちは「価値」、すなわち「～に値すること」と呼んでいるのである。

とかく、わたしたちは、「興味をもっていることがない」のは悪いことのように、何ものにも興味を示さない人を諭そうとする。だが、個々人の「興味」のあるなしは、その人の責任に帰するだけで済まされることではない。個々の学生が興味をもっていることがあるかないかは、価値意識の形成がしっかりとなされる社会であるかどうかの問題でもあるのだ。

何かに強く「心を傾ける」ことが難しくなっている社会、それがいまの日本である。「興味をもっていることが何もない」ということから、じつは「学問」ははじめられるのだ。

（くろみや かずもと）

## ◆◆◆◆ 『教師のこころの扉をひらく』を読んで ◆◆◆◆

臨床心理学科4回生 安田小響

大学生活4年間、ボランティアという形で沢山の子どもたちと関わってきた。この本を読んで、その関わり方を根底から再考させられる思いがあった。子どもたちを支える先生や保護者、職員の方々が、子どもたちに対して、また自分自身に対してまっすぐに生きるという強い姿勢と信念を持って子どもとともに生きている様がありありと記されており、飾らず、無理をせず、素直なままで自らの心の扉をひらくことの大切さが語られている。

この本に登場する大人たちは皆、子どもの成長を見守り続けていく中で、子どもたちを通してそれぞれ大切なことは何か、に気づかされている。

「これまで息子が何かを欲しがると、それを買うか買わないか、どちらかの選択しか頭にありませんでした。しかし造形教室に参加することで、第三の選択肢としてくつくる>ことがあることを教えていただきました。」と語っている。子どもが、自分の作りたいものが完成したときの達成感を味わっている横で、それを見守る母親も子どもとともに喜びを感じることで成長しているという新しい発見をしている。この一体感を味わうというのは、本当にすばらしい瞬間であると思う。そういった発見によって大人と子どもがともに生かされているということを体感しているのではないか。子どもの無心なものづくりから、母親の心の扉がひらかれたのであろう。この『教師のこころの扉をひらく』で筆者は、大人と子どもが一体になる瞬間について、「教師の言葉が生徒の心にしみわたっていくのはどのような場合なのだろうか？」という問いを通じて、「語りかけることが誰かの言葉の借りものではないことと、相手に向けて語っているその言葉が、自分自身にも向けられていること、つまり話し手と聞き手がその言葉

を自分の置かれた状態でそれぞれ味わい、さらに深めていく“共感の場”がつけられることが大切である」と示唆している。私はこれらのエピソードを読んで、ボランティア先の小学校の先生の言葉を思い出した。「子どもたちに対して、さっきのあのことについてもう一度伝えようと頭で考えてから話そうとしても、子どもたちには伝わらないものですよ。その時に言わないと。」指導とは、その時、その場で、その子とともにということ以外にはないのではないか。もちろん信念を持って。子どもたちと接し、その時をともに感じて大切な何かをつかみたい、その重要性をまた鮮明に思い返すことができた。今まで、子どもたちと関わる上でどうしたらよいか分からず戸惑うことも沢山あったが、それは、私自身が心の扉を開くことができなかつたからである。そのことに今回、改めて気がつくことができた。

この本は、ひとつひとつのメッセージがまるで乾いた砂に水がしみこむごとく、心にしみわたるものばかりであった。それはこの本を手にする私たちにも「心の扉をひらきなさい」というエールを送ってくれているのである。人生の先輩の暖かいメッセージを心に受けとめながら、これからも沢山の子どもたちと一緒に多くの発見をし、成長していきたいと思う。そういう点でも、是非、子どもの育成に携わる多くの人々にこの本を読んでもらいたいものだ。いや、子どもの育成に携わらなくとも、自らの心の扉をひらくためにも。今日も子どもたちは、そういう大人にめぐりあうことを願っている。

(やすだ さゆら)

『教師のこころの扉をひらく』

佐久間勝彦 著／教育新聞社